



宮司会長

全日本バレーボールチームが本市で初めて合宿を行ったのは、平成17年。きっかけは1本の電話でした。市バレーボール協会の宮司保会長は語ります。

「全日本男子チームが以前合宿していた会場がなくなったため、合宿できる施設がないかと県を通して薩摩川内市に電話がきたのです。熟慮した結果、話を受けることになりました」。

1本の電話を機に、市とバレーボール協会が一体となり合宿誘致活動に取り組んだ結果、男子チームの合宿誘致に成功します。合宿に訪れた当時の植田辰哉監督は、「気候も良く施設も素晴らしいので合宿地に選んだ」と話しています。

合宿誘致活動は続き、平成21年には、男子チーム・女子チームともに本市で合宿を行い、毎年のように本市で合宿するようになりまます。

また、本市の社会体育の拠点である総合運動公園の機能充実を図るため、合宿施設「スポー

交流研修センター」の整備に取り組み、平成24年に完成。翌年3月、市総合運動公園総合体育館(サンアリーナせんだい)が日本オリンピック協会から「バレーボール競技強化センター」に指定されました。合宿所が併設されたことも認定の理由になったといひます。

宮司会長は、強化センターに認定された効果について「バレーボール競技強化センターは全国で北海道芦別市、神奈川県川崎市(ビーチバレーボール)、薩摩川内市の3カ所しかない。この認定を取ったことにより、他競技の指定施設とパートナーシップを結び、スポーツ合宿がより一層広がり、我々が誘致活動を積極的にできるようなになっています」と話します。この効果をj持続させるため、2020年の東京オリンピックと鹿兒島国体を見据えた上での強化指定の継続を目指しています。

昨年は、女子チームが6月に男子チームが10月に合宿を行い、両チームとも紅白戦を開催し、市内外から計4600人の観客が詰め掛けました。紅白戦前に開催されたバレーボール教室では、憧れの選手から直接指導を受けられるなど、子どもたちの

「小さな大会だからこそ、地域に帰ってきてもらおう感覚で『また来たよ』と言ってもらえるような大会だったら良いなと思います」と話すのは、大会発起人の唐澤智子さん。

平成24年に始まった「こしき島アクアスロン大会」。この大会は、「島おこし」の一環として開催されました。甌島の地域おこしプロジェクトの一員として島おこしに携わっていた唐澤さんが、きれいな海を活用して何かできないかと考えていたときにトライアスロンを思いつき、日本トライアスロン連合に連絡したのがきっかけでした。

「実際に連合の方が来てくださったのですが、『下甌島は起伏があるため、自転車競技をする際の安全対策に費用がかかる。まずは、アクアスロンから始めたらどうか』と勧められました」

昨年の全日本女子バレーボールチームによるバレーボール教室では、パスなどの基本について教えてもらいました。腕を振らないことなど、普段の練習でも気を付けるようになりました。

近くで見る全日本のバレーボールは、テレビとは迫力が違いますし、憧れの選手のテレビで見られる部分以外の姿も見られるので嬉しいです。



Case 03 全日本男女バレーボールチーム合宿

隈之城バレーボール
スポーツ少年団
伊東愛莉主将



Case 02 こしき島アクアスロン大会



こしき島アクアスロン大会
実行委員長 中川三継さん

昨年は消防団として警備などを取りまとめ、今年には実行委員長として大会に参加しました。実行委員長として最も気を付けたのは、最高のおもてなしで島に訪れた方に甌島の良さを感じてほしいということです。大会終了後に、参加者からの「島のおもてなしに満足した」という声を聞き、大会スタッフやボランティアなど嬉しさを分かち合うことができました。また、大会を支えてくれたスタッフやボランティア、トライアスロン連合などの関係者には大変感謝しています。

と当時を話す唐澤さん。そのとき、初めてアクアスロンという競技を知ったといひます。

トライアスロンは水泳、自転車ロードレース、長距離走の3種目を続けて行う競技。アクアスロンは、この内、自転車ロードレースを除いた水泳と長距離走の合計タイムで競います。

「支所の職員や会う人など、さまざまな方に話をjして、多くの方に興味を持っていただきました。もちろん、実行に移す前には、地区コミュニティ協議会だけでなく漁業協同組合や漁師さんなどに実施したい理由を何度も説明しました。反対意見はほとんどありませんでしたよ」

いろいろな方からの協力を得て大会の準備は進みます。

「物理的に物を用意するなど問題はありましたが、協力体制を作る上で大変なことはありませんでした。皆さんすごく協力的で人に恵まれたと感じます。大会規則や必要なものなどは日本トライアスロン連合に指導していただきまししたし、大会の運営に関しては約150人の地元ボランティアに支えていただきました」と大会を振り返ります。

選手1人にボランティア1人がサポートとして付く全国で

も珍しい体制を用いて大会を実施。選手にタオルや飲み物を渡すなど、手厚くもてなしました。

「アンケートには、コースもいいが島の雰囲気や応援などの手作り感が良いという感想がありました。幼稚園児から中学生までの子どもたちや地区コミュニティ協議会、漁協、消防団、自衛隊、生活研究グループなど、島をあげて協力してくださって本当に感謝しています」

大会と合わせて地元で捕れた魚介類などを振る舞った歓迎式や観光ツアーを企画するなど、甌島のPRも欠かさない。

「県外での甌島の知名度は、決して高くはないです。島外へPRしていくことは大変ですが、このようなイベントがあれば島に来て知ってもらえるという意図もありました。交流人口を増やすために、いろいろな工夫をしていきたいです」と希望を語りました。

大会を通じて甌島のファンを増やす取り組みは始まったばかりですが、PRの手はゆるめません。

唐澤さん